博物館学雑誌 第24巻 第1号（通巻29号）55～74ページ 1998年10月

【報告】

野田市郷土博物館における特別展『写真が語る野田の歴史と文化』と『野田の新しいまちづくりフォーラム』の開催
—郷土博物館による「まちづくり」活動の一例—

The Special Exhibitions in Noda City Museum
—An example of the Activity for Town Cultivation by Local Museum—

金 山 喜 昭*
Yoshiaki KANAYAMA

はじめに

1997年（平成9）は、地方自治法が施行されて50年目にあり、全国各地で多彩な記念行事が行われた。野田市では、地方分権推進委員会委員長の諸井 虔氏[1]による『地方分権型社会における住民の役割』(㈳野田青年会議所主催)、前岡山県知事の長野士郎氏[2]による『行政改革と地方自治』(野田市主催）と題する講演会[3]などが開催された。その中で、私が、最も印象深く受け取ったものは、長野氏による「地方自治は郷土愛から、郷土愛は歴史から、地域づくりの基礎は郷土愛から正しい歴史教育の必要」という発言であった。

戦後50余年が経過した現在、これまでの地方自治は見直しが迫られていることは周知の通りであるが、その基礎はまず住民が自らの地域の歴史を理解して、地域に愛着や誇りをもつことである。長野氏の言われるように、「地域づくりにおける府県や市町村の役割は、みんなの市町村、みんなの県の推進役であるとの自覚と活動（地域は自らがつくる)」というように、地方の主体性が重要となってくる。その前提となるのは、市民意識の形成であるが、博物館にはその前提条件を構築してゆく役割の一端を担う可能性があると思う。

本稿は、博物館が「まちづくり」における住民の意識を高めることができる可能性をもつという観点にたち、1997年（平成9）に野田市郷土博物館が実施した特別展『写真が語る野田の歴史と文化』と、関連事業『野田の新しいまちづくりフォーラム』を報告する。

その構成は、『写真が語る野田の歴史と文化』が過去を振り返りと現在と比較するのに対して、『野田の新しいまちづくりフォーラム』は過去の遺産を踏まえて将来を展望しようとするものである。

1．特別展「写真が語る野田の歴史と文化」の開催

市民意識を形成してゆく上での博物館活動の目標は、住民が「まち」の歴史や文化を認識することにより、その「まち」に誇りや愛情をもつようにすることである。住民が、そのような気持ちをもつことが、「まちづくり」の出発点である。

そこで、野田市郷土博物館では、特別展『写真が語る野田の歴史と文化』を企画した。その趣旨は次の通りである。

> 明治から昭和時代の野田は、産業経済、行政、教育、文化、自然などのあらゆる分野において、それらを調和した「まちづくり」が行われていた。しかし、戦後は周辺部における鉄道の整備やベットタウン化が進むにつれて、野田は当時の面影を失うようになった。今後21世紀に向けて、住民が親しめる新しい野田の「まちづくり」

＊野田市郷土博物館 館長補佐

平成10年7月18日受理

を実施してゆくためには、住民が当時の歴史的景観を認識して、現在の地域に誇りや愛着の気持ちをもつことが大切である。

(1) 野田の地域的特徴

現在の千葉県野田市域は、近世には天領や旗本・大名領地であった。江戸中期の文化・文政期に野田町は醤油産業が盛行するようになり、その系譜は明治・大正・昭和を通じて現在に至る。野田町の周囲には村落が分布し、畑作や稲作を生業としていた。戦後の1950年（昭25）に野田・梅郷・七福・旭の1町3村が合併し、1957年（昭32）に川間・福田の2村が加わり、現在の野田市（人口120,916人、1998年2月1日現在）が誕生した。1960年頃から本格化した国の高度経済成長政策により、全国各地の農村社会が崩壊しはじめ過疎化が生じ、大都市への人口流入が進み、地方都市は衰退化するようになった。また、都市化が進むことにより、自然環境が失われたり、ダイオキシンなどの環境汚染のように、人類の生存そのものを脅かす事態も生じつつある。野田市は、東京から30キロ圏内に位置することもあり、過疎現象はないものの、「まち」の景観は最盛期の面影を失い、農村部は都市化が進み、祭り行事も減り民間習俗が急速に姿を消しつつある。

その一方、旧野田町には、明治から戦前までの歴史的建造物が残り、現在でも使用されている。それらの多くのものは、野田の基幹産業である醤油産業やその関連施設。例えば、醤油会社社屋、醤油工場、醤油仕込み蔵、醤油醸造家の屋敷のほか、昭和初年に醤油会社が資金を提供してつくった小学校（現・野田市立中央小学校）、上水道施設、銀行（現・㈱千秋社）、興風会館などの公共施設などがある。ことに戦前までは、醤油会社が利益を社会還元する目的で、「まちづくり」のために、公共投資をおこなったが、それらが今日でも「まち」の生活空間の一部として息づいている。

(2) 住民からの古写真の提供

特別展は、戦後の高度経済成長により「まち」の景観が変貌する以前の、1960年代以前の古写真を通して、野田地域の自然景観、町並み、人々の暮らしぶりなどを紹介するものである。

それに先立つ1990年（平2）に野田市秘書広報課が、市制施行40年周年記念事業として『遠ざかる風景』という、野田市の生いたちを写真で綴る写真集を刊行した[4]。内容は、明治から戦後までの行政・交通・産業・風俗・自然・宗教・郷土芸能・教育などについて、古写真に基づき解説したもの。掲載写真は500枚以上。収録物中には、1954年（昭29）7月に民俗学者の柳田国男が野田において郷土芸能のつく舞いについて講演した記録を初掲載するなど資料価値の高いものがある。実は、博物館が所蔵する古写真は、このときに全て提供したので、手持ちの古写真は大半が発表済みのものであった。

そこで、古写真を新たに収集することにした。野田地域は、醤油産業の繁栄により富裕者や趣味人が比較的多く、写真館が撮影したものや、個人撮影のものを含めて、古写真の潜在的な所蔵者は、まだ多くいることが見込まれた。

このような特別展の場合には、なるべく住民が参加できるようなスタイルにした方が関心を高めることができるので、古写真の提供を公募することにした。公募は、特別展開催の10ヶ月ほど前の、1997年（平9）1月中旬から、市広報紙やタウン誌、新聞などを通じて行ったところ、67人の住民（企業・学校などを含む）から約1000点の古写真が集まった。

写真は、明治から昭和40年代に及ぶものであり、中には写真館が撮影した台紙付きの記念写真もあれば、スクラップブックに貼られた日常風景を写したものなど多彩であった。また、絵葉書や、今までに見たことのない珍しい写真も含まれていた。その筆

写真1：特別展の統一デザイン
（明治時代の野田本町通り）

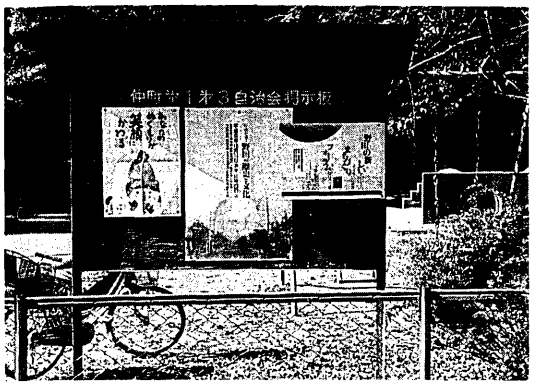

写真２：市内の自治会掲示板に貼られた特別展ポスター（中央）とフォーラムポスター（右側）

頭は、明治末期から大正初期と推定される野田本町通りの町並みの写真が絵葉書として見つかったことである。それは旧野田町の目抜き通りで、現在のやや衰退化した姿に比べれば、当時の方が遙かに趣きがあり、ゆったりをした町であったことが分かる。

そこで、これをポスターや図録の表紙に利用するなど、特別展の統一デザインにすることにした（写真１・２）。

(3) 住民からの原稿「私の思い出の場所」の提供と図録・チラシの作成

また、図録に掲載するために住民から、昭和40年頃までの野田市内の建物や自然風景などにまつわる思い出の場所についての原稿を寄せてもらうことにした。特別展は、なるべく住民が参加できるように図録にも配慮をした。

募集は、1997年（平９）８月１日から１ヶ月ほどの短期間であったが、市広報やタウン誌、新聞などを通じて呼びかけたところ、50人の住民から原稿が寄せられた。それらには、子供の頃の遊び場や、学園生活や映画館、町なかの様子や、周辺の田園風景など様々な光景が綴られている。いずれも、過ぎ去った過去に対する哀愁の気持ちを感じることができるが、今では失われた当時の「まち」の情景や風物を伺い知ることができる貴重な証言ばかりである。そのうちの一編を紹介する。これは、市内で会計事務所を経営している栗林達雄さん（大14年生れ）から寄せられた「醤油工場風景」[5]と題するものである。

愛宕駅から愛宕神社に向かい、神社を左に折れて本町通りに出た。木造の商家が両側に軒を並べていた。やがて左側に鉄筋コンクリート造りの建物が見えてきた。町並みには少しそぐわない建物だと思いながら看板を見ると、「野田商工会議所」とあった。そのすぐ隣に石造り二階建ての建造物があり、玄関からは中が見えない仕組みになっている。子供の頃からの記憶にある銀行の典型的な構造で、それが千葉銀行野田支店、いまの株式会社千秋社であった。

更に行くと前方に三階建ての地方都市には珍しい立派でモダンな建物が見えてきた。何だろうと興味を持って歩を進める。堂々とした玄関の構え、「興風会館」の表示があった。

少し戻って十字路を左にまがる。まっすぐ行けば醤油工場があり、その先に江戸川が流れている、と教えられてきた。暫く行くと人家が途絶え、道は下り坂になる。坂の途中の右手に工場が見えてきた。今日の目的の場所である。黒瓦に黒い板塀の工場群、白壁と黒板壁のコントラストも鮮やかな同じ棟の形をした倉庫群が立ち並んでいる。広大な敷地であった。煙突からは盛んに黒煙が立ち上がっている。

道路から少し入ったところに店があった。格子戸造りで土間の向こうに帳場が見える。店の前の広場では４、５台の大八車に大勢の人達が醤油樽を積み込む作業をしていた。シャツにズボン、ハッピに前掛け姿の男衆であった。地場産業としての醤油工場、なんと活気に溢れた光景であったことか。しばらく立ち止まって眺めていた。

左手には広々とした田園が続き、その前方には堤防が見えた。土手には桜の並木があり、花の盛りであった。堤防に上がってみると江戸川がとうとうと流れていた。対岸に目をやると、そこにも田圃が広がり、農家が点々と見えた。

これが私が37年前から持ち続けてきた野田の思い出に残る場所の記憶である。私が新潟県から出てきて野田で会計事務所を開いたのが昭和35年の１月。野田の町を知らなければと知人に教えてもらってそこに行ったのがその年の４月半ばであった。それから十数年経って、あの辺りはどうなっているのだろうかと訪ねてみた。

ところが記憶に残っている場所はどこにも見当たらなかった。それでもと江戸川の堤防を上流に向かって歩いてみた。行けば行くほど堤防下の工場は新しいものに替わっていた。ついに御用蔵のところまで来てしまった。御用蔵は記憶の中に全くないのだからここまで来てはいないはずだ。位置からすると今の上花輪プラントから今上プラント辺りであったと思われるのだが、それ以来折にふれ調べてみた。

例えば平成2年3月31日野田市発行の『遠ざかる風景』(市制施行40周年記念記録写真集) 82ページから83ページあたりではないかと思うが記憶のものとはかなり違う。町の古老数人に聞いてみたが確かな答えは得られなかった。

私が三十数年抱いてきたあの醤油工場は一体どこだったのだろう。そういう場所はそもそも無かったのだとするならば、私の脳裏の中に温められてきたあの風景は、私がその時見たものではなくて、その後の、場所の異なるいくつかの風景がいつのまにか混ざり合い合成されて記憶の中に固定されたのかもしれない。現在となってはその場所を確かめる手立てはもう無いのかもしれない。

建造物には物理的寿命、経済的寿命がある。だが、思い出の風景は時が経てば経つほどにより一層美しく記憶の中に育まれていく。いまはあの場所を詮索するつもりはない。初めて見た地場産業の、逞しく力強い息吹を感じさせてくれたあの風景を、いつまでもしっかりと心の中に残しておきたいと思っている。

図録は、このような気持ちが込められた住民の原稿や写真に基づいて作成することにした。タイトルは、『市民がつづる郷土への想い　写真が語る野田の歴史と文化』というもので、こちらはもっぱら企画と編集作業に限り、中身は全て住民から寄せられたもの。目次の構成は、〈町〉〈村〉〈川〉〈利根運河〉〈清水公園と座生沼〉〈駅〉〈醤油工場〉〈学校〉〈神社・仏閣〉〈田園〉からなり、それぞれの項目にちなむ写真や原稿を割振り編集した。掲載写真は343点で、A4版・155ページの図録となり、2,000部印刷した[6]。チラシは、やはり図録と同様に統一デザインの写真を使用した（写真3）。

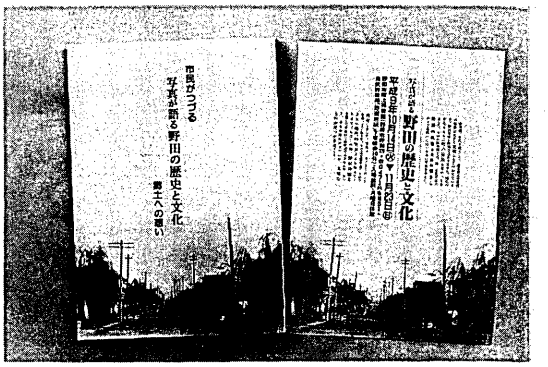

写真3：図録とチラシ

(4) 特別展の実施

特別展は、野田市郷土博物館において、1997年（平9）10月14日から11月23日まで実施した。まず、会場のエントランスには、統一デザインにした「明治末期から大正初期の野田本町通り」の写真を配置（写真4）して、展覧会の導入部とした。来館者は、しばしば立ち止まり、失われた当時の野田町の面影をそれぞれ辿ることになる。来館者からは、撮影場所が現在のどこなのか、あるいは当時の風俗や町並みの様子などについて盛んに質問が寄せられるなどの反響があった。そこで特別展の挨拶文が次のように語りかける。

戦後、わが国の高度経済成長は都市、農村、自然などに変化を及ぼしました。東京近郊の各地ではベットタウン化が進み、その変化は著しいものでした。野田においても、特に昭和40年代に入ると、それまでの伝統的な町並みや農村風

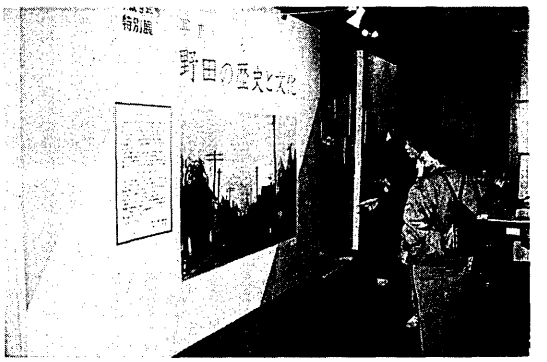

写真4：エントランスの写真パネルを見る人たち

景などにも影響が及び、また風俗習慣などの社会生活も変化しました。

古い写真は、それ以前の郷土の風景を再現してくれる貴重な資料です。今回の特別展では市内に残る古い写真を市民の方々のご協力を得て広く収集し紹介いたします。これをおご覧になって「懐かしい」とお感じになられる方もいらっしゃるでしょう。あるいは新たに野田の魅力を感じる方もいらっしゃると思います。

また、特別展にともなって発行いたします図録には、市民の皆様の「思い出の場所」についての原稿を寄せていただきました。合わせてお読みいただき、当時の様子を追体験していただければと存じます。(後略)

展示の構成は、図録と同じように、〈町〉〈村〉〈川〉〈利根運河〉〈清水公園と座生沼〉〈駅〉〈醤油工場〉〈学校〉〈神社・仏閣〉〈田園〉のようにコーナー分けをした。各コーナーには簡略な解説文を付けて、展示写真は全紙サイズに引伸ばして展示した。各コーナーの解説と主な展示写真は次の通りである。

〈町〉柳の木立ちに瓦屋根の町並みといった時代劇の舞台のような風景に、電柱や電灯、人車鉄道のレールという新しい要素が加わったものが明治・大正の野田町である。昭和に入るとこの町並みの中に一際目立つ興風会館がそびえ立つ。また、警察署、商誘銀行、町役場、共楽館などの近代的な建物が華やかな野田の「町」を代表していた。現在の風景を比べて何が残り何が失われてしまったのか（写真5・6）。

〈村〉昭和25年に野田・梅郷・七福・旭の1町3村が合併し、同32年に川間・福田の2村が加わって現在の野田市域が形成された。昭和40年頃までは、一部の町場を除いて田や畑が広がる農村であった。農村に残る写真のほとんどが農業に関わるものである。農作業、井戸掘り、排水工事、農会、共同作業などが村の生活の重要な部分を占めていた（写真7・8）。

〈川〉江戸川・利根川という大河に囲まれた野田は水運によって江戸東京をはじめとして関東各地とつながっており、川は生活と深く結びついていた。昭和初期に交通輸送の手段が自動車に替わると橋が整備され、洪水を防ぐために流路を変える改修工事が行われ、堤防は高く堅固になり、川の風景も大きく変化した（写真9）。

〈利根運河〉昭和23年に完成した利根運河は、利根川と江戸川を通航する船舶にとって、大幅に航路を短縮する近道であったが、鉄道網の発達、たび重なる洪水の被害などでその役割を果たせなくなった。その後、この水路は「派川利根川」として洪水の分派や都市用水の供給を目的にするようになった（写真10）。

〈清水公園と座生沼〉明治26年に開園した当時は、聚楽園（しゅうらくえん）といい、多くの文人墨客が来訪して賛辞を送り、早くから名勝として知られていた。特に桜は座生沼をはさんで対岸にある岩名の桃と並んで有名であった。座生沼は明治43年に干拓が認可されて水田となったが、冬はボート池として利用され憩いの場となっていた（写真11～13）。

〈駅〉明治44年、千葉県営野田軽便鉄道が野田～柏間に開通した。その後、北総鉄道、総武鉄道と名称を変え、昭和4年に清水公園まで、昭和5年には春日部まで線路を延長させた。それにより有吉町にあった野田町駅は現在の場所に移動し、愛宕・清水公園・川間に新しい駅ができた。戦中に総武鉄道は東武鉄道に合併し、現在の野田線に至っている。昭和43年、七光台に新しい駅ができた（写真14・15）。

〈醤油工場〉キューポラや工場の煙突、運河など地域の産業と結び付いた風景がシンボルマークとなっている町がある。野田の場合は醤油工場の古い蔵や黒板塀、赤レンガの壁の風景がそれにあたる。仕込み蔵は「工場」から近代的な「プラント」へと変化を遂げ、また市街地や江戸川沿いの工場が次々と撤廃されていくにつれて、町の風景も変わりつつある（写真16・17）。

〈学校〉明治5年に学制が発布されると、野田においてもそれまでの寺小屋などの民間教育施設にかわって国家が定める「学校」が登場した。その後、学制の変化に伴って統廃合を繰り返したが、例えば明治6年創立の愛光小学校のように、茂木小学校、野田尋常高等小学校と名称を変え、現在も野田市立中央小学校として120年以上もの歴史を誇っているところもある（写真18）。

〈神社・仏閣〉神社や寺院は町や村の共同体によっ

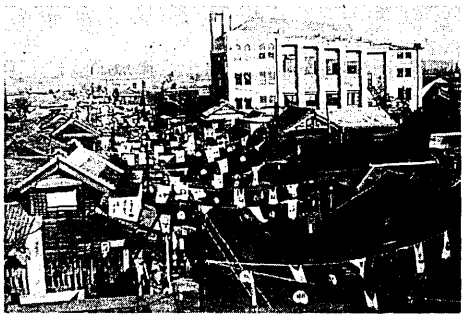

写真５：本町通りと興風会館(昭和７年)

写真６：商店街をねり歩くチンドンヤ(昭和33年)

写真７：農作業の休憩(昭和32年頃)

写真８：泥祭りの様子(昭和20年代)

写真９：江戸川にかかる野田橋(昭和５年頃)

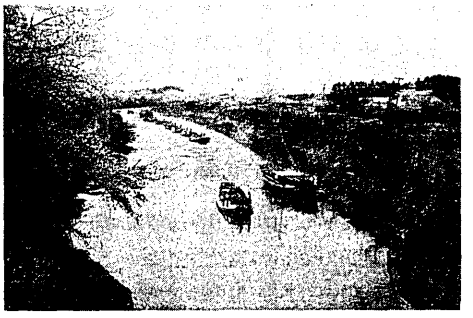

写真10：利根運河を行き交う船舶(大正時代)

写真11：座生沼で船遊びをする人々(昭和７年頃)

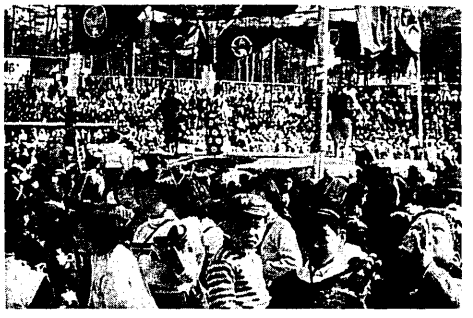

写真12：清水公園で開かれた大相撲(昭和35年)

写真13：座生沼でのキャンプ(昭和10年頃)

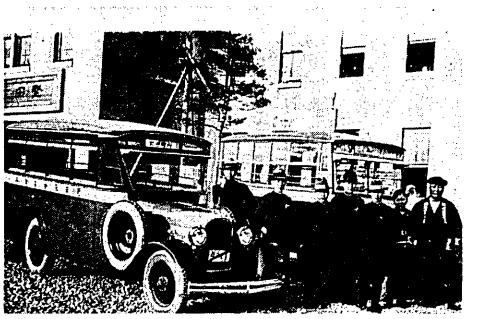

写真14：野田駅前の乗り合い自動車(昭和10年頃)

写真15：野田駅構内の列車(昭和７年頃)

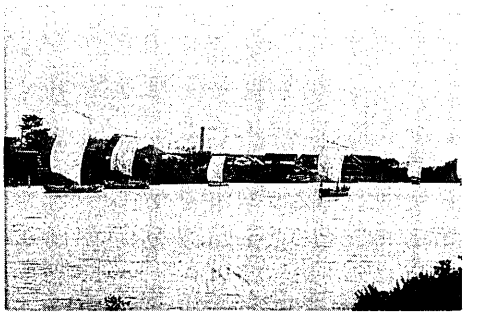

写真16：江戸川の高瀬船と醤油工場(昭和５年)

写真17：醤油樽の運搬作業(昭和５年頃)

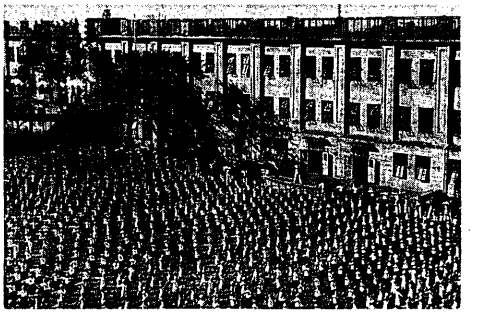

写真18：野田尋常高等小学校での体操(昭和10年頃)

写真19：愛宕神社での記念撮影(大正時代)

写真20：利根川を臨む(昭和31年)

て行われる冠婚葬祭などの行事が行われる場として、実生活と密接に結びついた存在であった。特に祭りは数少ない娯楽として熱気と活気のあふれるイベントであり、人々の結束を高める機能をもっていた。その中から、つく舞やバッパカ獅子などが民俗芸能として残った。また、子供たちには遊びの場という空間を提供した（写真19）。

〈田園〉私たちがイメージする田園とは、すなわち人間生活としての“原風景”なのではないだろうか。人間は生物として尊い存在であり、人間が生きていくためには自然により生かされているという認識が必要である。田園には、人間らしく生きる環境空間がある（写真20）。

(5) 会場の様子（写真21～24）

会場内はＢＧＭを流して、ゆったりした展示環境のなかで観覧できるように配慮した。

来館者が最も関心をもったものは、エントランスに設置した明治時代の野田本町通りの大型写真であった。現在の不活発な商店街の様子とは異なり、当時の落ち着きをもった町並みに驚きをもつ人たちが多かった。この写真は、本町通りということは判明しているが、さらにどの場所から撮影したものかがなかなか特定できない。調査時にも、付近の古老から聞き取りをしたものの、複数の候補地があり不明のままとなっていた。来館者の関心は、その辺にも集まり、いろいろと見解を述べる人たちがいて、さながらサロンのような雰囲気になった。

それから会場内を一巡することになるが、来館者はどのコーナーでも、食い入るようにして写真を見ている様子が印象的であった。人によっては、展示写真の中に当時の自分や家族・親類・知人に偶然出会うこともあり、思い出の場所や光景などのように住民には身近なものばかりである。実際のところ、高齢者の来館者は、当時の様子を懐かしそうに話したり、思わず肉親が写っている写真を見つけてわざわざこちらに教えてくれたりした。

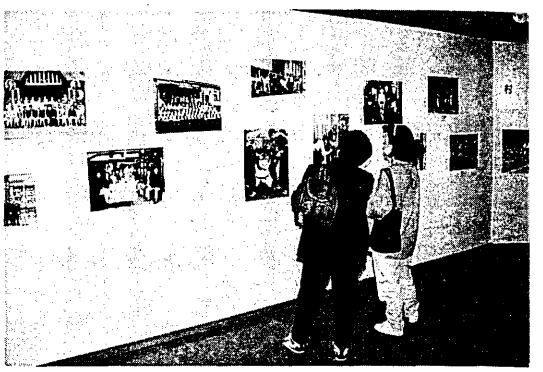

写真22：展示コーナー〈町〉を見る来館者

あるいは、会場の展示写真を通して、来館者同志がお互いに知り合いとなり談話する光景も見られた。博物館内で、住民同志の交流が行なわれることは理想的である。

また、ある住民は、自宅にあった古写真を持参してくれた。拝見すれば、戦前の旧野田町の様子や、関東大震災時に被害を受けた様子を撮影した貴重なものである。展示会場での古写真の情報提供の呼び掛けに応えてくれたもの。提供写真は寄贈していただけることになり、早速それらを会場に展示することにした。会期中に住民から寄贈された写真がすぐ

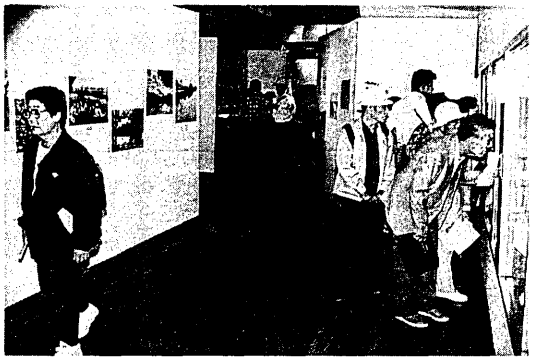

写真21：展示写真を食い入るように見る来館者

写真23：古写真や絵葉書を見る来館者

写真24：来館者同志の談話光景

に展示されることは、新聞などでも紹介されたことから、特別展の関心はさらに盛り上がりをみせることになった。

(6) 来館者の評価

来館者の評価を把握するために、次のような項目によるアンケート調査を実施した。

1．性別・年齢
2．居住地（市内であれば在住年数）
3．職業
4．来館頻度
5．特別展開催情報の入手法？新聞・市広報など（選択式）
6．特別展を見てどのように感じましたか？懐かしく思った・心の安らぎを感じた・誇りに思ったなど（選択式）
7．現在の野田市内で自然や歴史的建造物で好きな風景はどこですか？
8．歴史や文化を大切に守り育てていく「まちづくり」についての意見
9．特別展についての感想

これらの質問の中でも、6は住民の感想を類型的に知ろうとするもの。7は、住民の景観に関する意識を知ることができる。8は、歴史や文化に立脚した「まちづくり」に関する意見を求めるものである。9は、特別展についての意見を自由に述べてもらう。来館者8,718人のうち、アンケート回答者は1,576人で、回収率は約18%であった。

最初に来館者であるが、40～60才代の来館者が多く、それに30才代の来館者が続く。従来の特別展は50

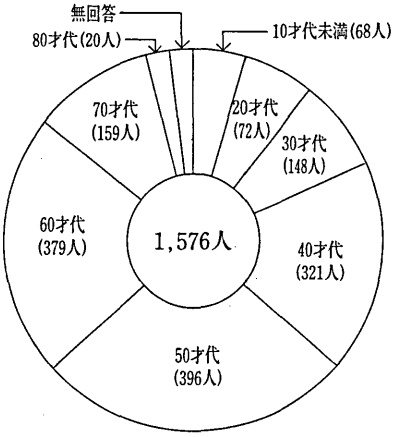

図1：特別展の年齢別来館者数
（来館者8,718人中、アンケート回答者1,576人）

才以上の来館者が多い傾向をもつが、今回は30～40才代が予想外に多かったことが注目される（図1）。

来館者は、野田市内在住者がおよそ7割、市外在住者が3割である。

職業別では、会社員がもっとも多く(31%)、主婦、無職（高齢者）が続く。年齢層の頂点は、会社員では50才代、自営業は40～60才代、公務員は40才代、教員は40才代、主婦は50才代となっている。無職は定年退職をした高齢者である。大学生や高校生は全体の6％であるが、これまでの特別展よりも多く、若者にも関心のあった事が分かる（表1）。

市内在住者は、特別展を見るために来館する場合が圧倒的に多い。その中には今回の特別展により初めて来館した人が4割にものぼることから、博物館に対する新たな認知者を増やすことになった。一方、市外在住者は特別展の開催を知らずに来館した人が約6割とやや多く、これらの人たちは観光などで野田に訪れて来館したものと思われる。しかし、市外在住者でも特別展をわざわざ見にくる人たちが約4割もいることは、今回の企画が周辺地域の人たちにも関心を及ぼしたことを示す。

特別展開催情報の入手方法は、野田市報が全体のおよそ5割（48%）と最も多く、タウン紙（16%）、ポスター（13%），新聞（10%）、自治会回覧板（8％）などである。いつもながら野田市報から圧倒的に多くの人たちが情報を得ていることが分かる。

来館者の感想については、野田市在住者は、40才

表Ⅰ：特別展来館者の年齢・職業別の内訳（単位：人）

職業＼年代	10才代未満	10才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代	80才代以上	無回答	計 (%)
会社員	—	1	21	57	135	194	60	10	0	4	482 (31)
自営業	—	0	1	13	35	33	34	9	2	3	130 (8)
公務員	—	0	4	15	31	17	7	2	0	1	77 (5)
教員	—	0	5	13	16	8	5	0	0	0	47 (3)
主婦	—	0	5	40	83	127	99	28	2	3	387 (25)
無職	—	0	5	6	8	8	138	82	12	1	260 (16)
学生	5	62	28	0	0	2	0	0	0	0	97 (6)
その他	—	0	3	4	13	7	36	28	4	1	96 (6)
計	5	63	72	148	321	396	379	159	20	13	1576

代以降は「懐かしく思った」「心の安らぎを感じた」が多いのに対して、30才代までの若年は「新しい発見があった」「初めて当時の野田のことを知った」が顕著である。つまり。40才代を境界にして、それ以前の年令層は「知的理解」に、それ以降は「感動」にウエイトがおかれたようである。しかしながら、各年令層において「誇りに思った」「愛着を感じた」が2割前後と一定であることは、「郷土に対する愛着や誇り」を育むという、特別展の目的がある程度達成できたことを意味する（図2）。市外在住者も40才代以降に「懐かしく思った」「心の安らぎを感じた」が多いものの、その年齢層でも「初めて当時の野田のことを知った」が顕著である。これは当然のことながら、市外の人は高齢者でも当時の野田をあまり知らなかったというもの。一方、当時の野田について「感心した」は野田市在住者よりもやや多く、初めて野田を知ることにより、野田の魅力を発見したことにつながる（図3）。

現在の野田市内の好きな風景については、1位から10位までを見る（複数回答可）。すると圧倒的に清水公園に人気があることが分かった。清水公園は全国でも珍しい民間の公園で、1894年（明27）に開園したわが国でも有数の歴史的な公園。1929年（昭4）に本多静六博士の設計により現在の規模（約20万m²）の自然景観を生かした公園となる。上花輪歴史館は、醤油醸造家の旧高梨兵左衛門邸。御用蔵は、1939年（昭14）にキッコーマン㈱が建設した城郭造りの宮内省御用達醤油の仕込み蔵。茂木本家は醤油醸造家の茂木七左衛門邸。市民会館は醤油醸造家の旧茂木佐平治邸（写真25～27）。

1位　清水公園（金乗院や桜並木を含む）　281人
2位　興風会館　202人

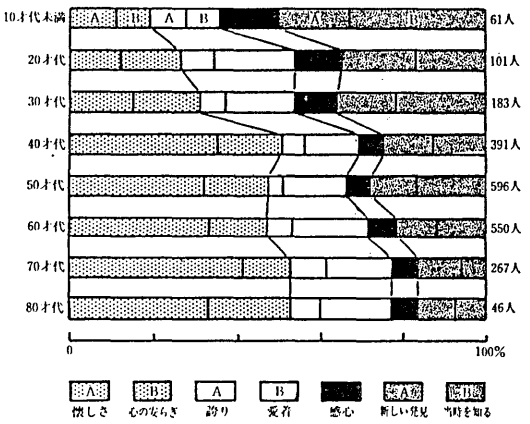

図2：野田市在住者による特別展の感想

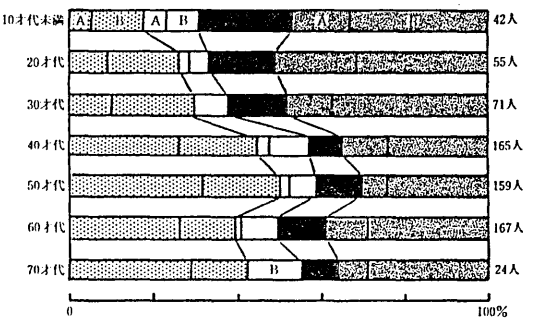

図3：野田市外在住者による特別展の感想

3位	キッコーマン本社前～茂木本家前	182人
4位	江戸川の眺め	180人
5位	上花輪歴史館	54人
6位	御用蔵	42人
7位	利根運河	40人
8位	愛宕神社	38人
9位	郷土博物館	36人
10位	市民会館（旧茂木佐邸）	35人

歴史や文化を大切に守り育てていくまちづくりのための意見については、およそ次のようにまとめることができる。

「歴史的建造物を壊さない」
「これ以上の開発をせずに自然を残す」
「樹木をこれ以上伐採せずに、山林を保護する」
「地域の歴史や自然についての学校教育や社会教育を充実する」
「児童たちに野田の歴史を普及する」
「歴史・文化と現実生活との融合をうまく図る」
「新しいものと古いものとの調和を図りまちづくりする」
「市民に野田の歴史の普及を図る。博物館や出版物などを通して」
「自動車の通行を規制して、安心して歩行できる街路にする」
「歴史的建造物の町並みを整備する」
「各地区ごとに、地区の歴史を見直す」
「旧市街地を活性化させる」
「キッコーマン本社を壊さないでほしい」
「清水公園の桜並木を壊さないでほしい」
「案合図や道標を市内各地に設けてほしい」
「このような企画を今後も続けてほしい」

このような意見には住民の行政に対する要望が含まれている。しかしながら、それとは対照的に住民が自主的に活動するべきであるという意見も僅かに見られる。そのいくつかを紹介する。「クリーン大作戦など市民運動により、意識を高めたり、一人一人が行動すること」（女性、49才、在住15年、教師）、「身近なことから始める。ゴミを捨てない。声をかける」（男性、51才、在住51年）、「保存奉仕グループのようなものを創設して、古い建造物などの手入れや掃除、保存活動や、懇親の場にする」（男性、45才、在住10年、自営業）など。しかしこのような意見は、

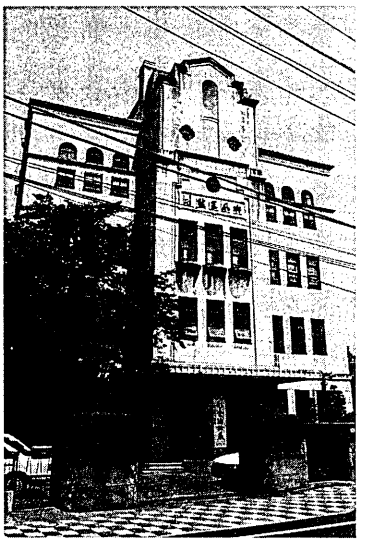

写真25：興風会館

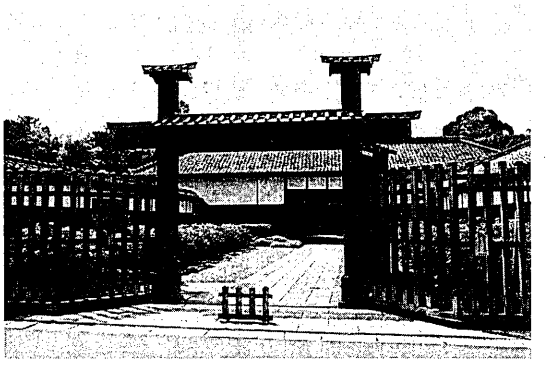

写真26：上花輪歴史館（旧高梨兵左衛門邸）

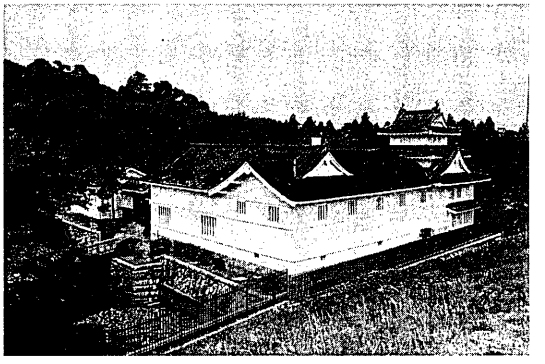

写真27：御用蔵

前述の行政に対する要望に比べればはかに少数であることは注目しておきたい。

最後に、特別展に関する感想を求めたところ、今回の特別展を評価するものが多くあったが、その中から注目されるものを原文のまま紹介する。「母は本町通りに面した商店の娘だったので、子供の頃の野田の華やかさを私によく話してくれた。今からはっきりいって想像もつかないほどだったと思う。そんな野田が今はダサイとか住みにくいとか言われると本当に悲しくなる。いつか母が話してくれたような町がかえってくるといいなと思った」(女性、19才、在住15年、学生)、「私は野田に来てまだ5年しか経っていないけど、ずっと野田に住んでいる様に思えて感動した」(女性、20才、在住5年、主婦)、「たまたま通りかかって知りました。野田に越してきて6年たちますが、昔の話はチラッと聞いても写真を見る事なんて今までなかったので、田んぼの風景なんて信じられなく楽しかったです。昔の野田幼稚園の写真も今通っているだけにすごくうれしかったです。少し誇りに思えました」(女性、28才、在住6年、主婦)、「すばらしい企画でした。私たち老年者にとって昔を知る野田人として、一層郷土愛が込み上げるものがあります。亡き父の若き日の姿を発見したことも胸を打つものがありました。まだ埋もれている写真があるはずです。二回目の展示も楽しみです」(男性、72才、在住72年、無職)、「最近、野田へ転居した者にとって、郷土史を知る上で非常に参考になりました」(男性、63才、在住6ヶ月、会社員)、「野田の昔が写真で大変良く解りました。昭和10年頃の町の発展に町民が皆協力して良い町づくりに誇りをもって、暮らしていたと新たにこの町を誇りに思います」(女性、67才、在住5年、主婦)、「実家に送られた写真集を見て、とても興味を抱き、来館しました。長く野田に住み、多くのことを知っていたつもりですが、大正・昭和初期の写真を見て、改めて歴史ある町であることに感心しました。亡き父が九州からこの野田に開業し、一生の地と選んだ意味が理解できた気が致します。この古い歴史をこれからも大切にして頂きたいと切に望みます」(女性、46才、東京在住)、「私達の愛する町は何もかも新しいものへと移っていきますが、古くて支えていかなければならない大切な伝統は守り通して頂きたいと思っています。そのためには市民も惜しみなく協力させて頂きます」(女性、66才、在住51才、自営業)など。

このような感想から知れることは、まず過去に対する郷愁が底流にある。さらに郷土に対する愛着の気持ちをひしひしと感じることができる。誇りという意識までなかなかいかないかもしれないが、そこには確実に愛着心をみることができる。祖父母の代から野田に住み、自分も生まれ育った人にとっては、郷土の愛着心を再確認することになったようである。あるいは、新住民にとっても、身近な地域の過去を知ることにより、愛着心が生まれたようである。

2.『野田の新しいまちづくりフォーラム』の開催

特別展の関連事業として、『野田の新しいまちづくりフォーラム』を開催することにした。特別展は、古写真を通じて野田の過去を振り返るものであるのに対して、フォーラムでは野田のこれからの「まちづくり」を検討したり、その展望を語る場にしようというもの。それは博物館で企画するものであることから、特別展で公開する古写真による過去の姿を基点として現在を見直して、将来を考えようとするものである。

(1) 住民との共同作業

作業は、なるべく多くの住民と共同で行なうべきであるという発想から次のような構成となった。主催者は、野田市郷土博物館のほかに、野田商工会議所、㈶興風会。なかでも㈶興風会は、1928年(昭3)11月の御大典記念に千秋社という市内の会社からの寄付によって設立された社会教化・保健衛生・育英事業などを目的とする機関であり、現在でも育英や各種文化事業を実施している。また、実行委員会として、主催者のほかに、野田まちづくり委員会、野田商工会議所青年部・同婦人部、野田青色申告会青年部・同婦人部が加わる。経費は主催者のみでは賄えないことから、協賛者としてキッコーマン㈱、利根コカ・コーラボトリング㈱、野田ロータリクラブ、野田東ロータリークラブ、野田セントラルロータリークラブ、野田ライオンズクラブにも趣旨を理解していただき賛同を得ることができた。さらに野田市、野田市教育委員会が後援者となる。

作業は、まず野田の現状や問題について意見交換

するところから始めた。ここではいろいろな意見が出された。それには、例えば旧市街地の空洞化現象がある。自動車が普及し、郊外に大型店が進出したり、ショッピングセンターができたことにより、買い物客がそちらの方に流れてしまい、旧市街地の店舗の活力が低下してしまい、閉店したり人が住まなくなるなどの現象が顕著になっている。ゴミ問題や環境問題なども深刻である。開発により自然が失われる一方、21世紀に向けて自然と人間が共存できるような方法はないのだろうか。あるいは、野田にはまだ歴史的建造物が比較的よく残されているが、これから再開発事業などで壊される危険性が高くなるが、歴史的な景観を生かした「まちづくり」も検討していきたい。

このような現状は、野田に限られたことではなく、全国の多くのまちで抱えている課題であるといってよい。できればそのような課題を公の場で一度さらけ出して、議論の俎上にのせて、その問題解決のために真剣に取り組む姿勢をアピールして、野田から各地にその姿勢を発信しようということになった。実行委員会ではそのような認識ができあがり、その具体化のために人選や構成などの内容を検討して、次のようなプログラムを作成した。

(第1部)

●スライド上映「時間を超え魅力探訪」

※明治～昭和における野田の様子（産業・風俗・自然・交通など）と現在の野田の景観を紹介して、その魅力を解説する。ここでは、特別展で公開する古写真と現代の写真を映写する。

●俳優・山下真司さんが野田を語る「山下真司・野田見聞録」(対談者　岸和田純江)

※テレビ番組『くいしん坊！万歳』の出演で全国各地を回っていたことから、野田の印象やその魅力、あるいは本人の故郷感などについて語ってもらう。

(第2部)

●パネルディスカッション「未来を創る、今～野田の新しいまちづくりを語る」

※人間と自然が共生できる「まちづくり」の在り方を基本において、野田の過去・現在・未来を語り、これからの「まちづくり」の方向性を探る。

パネラー	野田市長	根本　崇[7]
	野田商工会議所会頭	茂木　克己[8]
	野田自然保護連合会長	石山啓二郎[9]
	俳優	山下　真司[10]
司　会	野田まちづくり委員会委員	小川　浩[11]

(2) フォーラムの実施

フォーラムは、1997年（平9）11月22日に興風会館ホールで行われたところ、約400人の来場者があった。フォーラムの中核になるパネルディスカッションの概要を紹介する[12]（写真28～30）。

古いものを残しながら、新しいものをつくる

司会　野田のまちは、明治期にすでに清水公園ができて、野田病院や商誘銀行（現在の千秋社）もできているんですね。そして昭和の初めに本日の会場でもある興風会館が建てられるなど著しい発展を遂げてきました。歴史的な建造物が今でも残されている一方で、自然もまだ比較的豊かに残されています。これからの新しいまちづくりは、それらを再評価して、市民の皆さんの共有財産としていくことから始まると考えられますが、皆さんがお考えになっている野田の良さからお話しください。

茂木　野田に醤油事業が発展したのは、ご存じのように醤油の原料である大豆と小麦と塩がこの一帯で得られたからです。今もって名物になっている水戸納豆の小粒の大豆が筑波山の周辺でつくられていて、小麦は関東平野のどこでもとれていました。塩は行徳に塩田があったんです。そして、さらに江戸というマーケットや、江戸川という輸送手段があっ

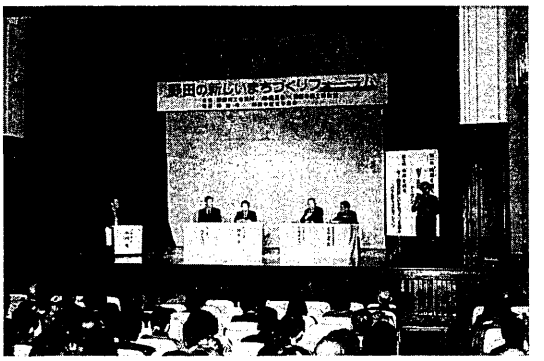

写真28：パネルディスカッションの光景

写真29：根本崇氏(右側)と山下真司氏(左側)

て、醤油の事業が発展してきたんですね。

「野田小唄」の中には「五百お蔵」という一節があり、「トンカラトン」というかけ声がでてきますが、醤油に関連して樽屋さんが発展し、舟と馬車に関わる人たちも増えてきて、町の人口の大体2割～2割5分ぐらいが関連産業の人々で占められていたわけです。そうした歴史の古きものを尊びながら新しいまちづくりをしていくことが、現在の野田市に住んでいる人々の共通の責任だと思うんです。

古いものを残しながら新しいものを導入していくということです。

今ある自然を土台にしたまちづくりを

石山　野田自然連合会は、7つの団体が集まって、湧き水や樹木の調査をしたり、市民観察会などを行なっています。私の小さい頃に比べて、自然が少なくなってきたのは確かに残念なことですが、まだまだ野田には林も水も自然がいっぱいあるんですよ。

11年前に、私たちは清水公園に野生のリスを放したのですが、リスという動物は緑の象徴といわれていて、リスが生息しているということはそれだけ森が濃いと評価される動物なのです。そうした活動を通して、憩いの場だとか公園があったり、自然と触れ合える環境のまちづくりができたらいいなと考えています。

これからのまちづくりは、新しく何かを作るのではなくて、今の自然を土台にしていくようなこと、具体的には現在ある林や里山をできるだけ残していくことが大切なのではないでしょうか。

「汚さない開発」の道を探るべきだ

司会　山下さんは、郷里の下関に年に2・3回はお帰りになるそうですね。ふるさとにはどのような想いがありますか。

山下　小さい頃、泳いでいた海が汚れているというのは、日本海側でさえ例外ではないですね。九州の工業地帯の存在によって、日本の経済が発展したわけで、それは仕方がないこととはいえ、あの美味しい魚が食べられなくなるということは、結局、自分達で海を汚して自分達の体を汚すことになるわけですね。

自然環境の保護というのは、“汚さない”ということが一番のキーポイントだと思います。

……なるほど、「汚さない開発」。これも真実ですね。さて、市長さんは野田をどのように見ていますか。

文化の高さを取り戻したい

根本　私はいつも「故郷(ふるさと)」という童謡を思い浮かべます。つまり、「うさぎ追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川」という状態が、この野田で出来ればいいなと。実際には、野田には野兎がいっぱいいるのです。魚もいっぱい釣れます。ただ、今の状態が良いとはいえません。水質面でも、環境面でも改善していかなければなりません。

同時に新しいものを作り上げていくことも必要だろうなと感じています。というのも、野田市においては、既に人間の経済活動が自然の自浄能力を越えて進んできている部分がかなりある。自浄能力にプラスアルファなものをどうやってわれわれがつくっ

写真30：石山啓二郎氏（右側）と茂木克己氏（左側）

ていけるのか、これが問題なんだと思うのです。

もう一つの歴史的なことでは、野田市は千葉県で一番最初に水道が引かれた町なんです。そうした過去の歴史における文化的なレベルの高さを、今、取り戻していくことが必要です。

企業の社会還元と市民生活

茂木　水道の話が出ましたが、私ども醤油づくりにとってまず大切なのは水です。それで工場で醤油をつくるのに井戸を掘って、各工場をパイプで結んで、水道をやっていた。江戸川の取水権もキッコーマンが持っていました。ところが企業が賄える限界がある。野田が大きくなってくると、川間や福田まで企業が水を運んでいくわけにはいかないので「ひとつ野田市に引き取っていただきたい」ということになった。もう一つ、病院はキッコーマンが法人組織になる以前から、醸造組合で経営していた病院なのです。これは市民の皆さんのお陰でこれだけの仕事をして利益を上げることができたので、市民のためにお返ししようという趣旨で、水道や病院の経営をしたということなんですね。それから清水公園も、お花見の後かたづけや普段の公園の清掃にゴミの関係がありますから市のご協力をいただいていますが、基本的には企業が行なっています。これは決して嫌々ながら行なっているのではない。市民の方々に対する奉仕だと思ってやっている。私は、市民と共に企業が栄えるという姿勢だけは続けていきたいと思っています。

地域のコミュニティーも大切な要素

根本　歴史的な再評価という点では、地域に残されてきたコミュニティー、これは大切ですね。これは今まで否定的にとらえてきたように思うのですが、周辺の農村地帯にはお祭りや行事を中心にして、それぞれの地域に昔からの共同体的なものが残っている。それが、今、それがゴミの減量問題や福祉のまちづくりにあたって相当な推進力に働いているんですね。

もちろん、旧地域だけがそうだということではありません。新しい住宅団地の中にもこうしたコミュニティーが出来つつあり、古い住宅地と新しい住宅団地との間に、例えば地区別の運動会などを通して交流がはかられつつあるんですね。こうしたコミュニティー活動は、これからのまちづくりに欠かせないものになるだろうと考えています。

開発との調和をいかに図るか

司会　ものだけ残せば良いというわけでなく、それをいかに生かすかは、わたしたち市民の心の問題なのですから、地域の人と人とのつながりは、たしかに大切ですね。

次に考えなければならないことは、開発・発展とどう調和させていくかということなのですが。

石山　とても難しい問題ですね。ただ、これまでの経済至上主義はやめなければならないと思います。儲かるものには関心を示すが、儲からないものには目を向けないというのは、結局のところ利己主義なんです。この利己主義がある間は、自然と共存した開発を行なうことは難しいでしょう。

それに、私の考えとは反対に、自然なんかいらないという人もいて、それぞれの価値観を否定することができない。それを調整していくことも難しいことですね。

難しいけれども、なんとかしなければならない。そのために、「野田市まちづくり市民100人委員会」とか「みどりの市民会議」など、市民の意見を採り入れようという現在の行政の取り組みは大いに意味のあることだと思っています。これがまとまってくると、野田市のまちづくりを絵に描いて分かりやすくしていくことが出来るんじゃないですか。

山下　皆さんのお話をお聞きしていると、野田市には歴史遺産がたくさんあるのだから、それを観光化して、お客さんが遊びながら勉強するというのも意味があると思いますよ。アメリカのラスベガスみたいに、新しい町をそっくりつくってしまうのと日本は体質的に違うんですから。

茂木　ラスベガスがどうしてあのような発展の仕方をしたのかというと、あそこは砂漠でなにもできないところだったんですよね。そこへいくと、野田市は水もみどりがあって、それはたしかに大事です。しかし、それを守っていくための原資を得る努力を忘れてはいけないと思うのですよ。

だから、例えば大気汚染を発生させないような工業が進出してくれることは、私たちはやっぱり大事

なことだと思います。大きな工業ができれば人口も増えます。「人口」というのは人の口と書くんですよ。なにか飲み、何か食べるんですよ。商業も活発になってくる。

保全をしなければいけない緑地とは場所を区切って、そうした工業誘致もして、野田市のさらなる発展に再投資をしていかなければいけないでしょう。

まちづくりの絵を描く時期にきている

司会　ということは市民によるイメージづくりから、行政の具体的な施策も問題になってきますが、市長はいかがお考えですか。

根本　先ほど石山さんがおしゃったように、そろそろ具体的な絵を描くべき時期にきているなと考えています。そのポイントの一つは長期構想にも唱っている「水とみどりを大切にしよう」ということ、それに、今、茂木さんがいわれた「飯が食えなければ困るんだ」という話がもう一つのポイントです。

これを調和させた絵をえがくことが大変難しいのですが、私自身は、現在の市街化区域に若干のプラスアルファを加えて、それ以外のところは基本的には現状のまま残していくつもりです。市街化区域で新しいまちづくりを行なって、市の税収を確保して周辺を守っていくというのが現実的な方法だと考えます。

まちの中心地域の再開発ですが、歴史的な財産を保存しながら、その特徴としたまちづくりを手掛けていけば、これからはすばらしいまちになってくるでしょう。その新しいまちに活力をもたせていく、そうした絵を今描きたいと思っています。

市民・企業・行政が力を出し合うまちづくり

司会　おしまいに、ご出席の皆さんから出されてきたキーワードにそって、一言だけまとめの言葉をお願いします。

山下　先ほど「汚さない開発」といいましたが、自然保護というのは結局は自分たちを保護することなのです。環境保護が21世紀の大きな問題になっていますが、これからは企業も個人も大人になって、未来の子供たちのために自分の利益だけを考えずに、「皆の幸せを考えなければ自分も幸せになれない」ということを肝に銘じるべきでしょうね。時代が変わり、また次にはいろいろな問題が出てくるでしょうね。その都度自分達の英知をしぼって、皆が自分の問題として考えていくことが大切でしょう。

石山　自然を大切にしなければならないということは誰でも考えているのですが、さて守るとなると、それにはお金と労力がかかります。例えば、貴重な生物が生息している沼を残すために――そんなことは知らないから皆でゴミを捨てて行ってしまう――そのゴミを週に何回となく自分の休みをさいて拾っている人がいます。私は頭の下がる思いです。これからはもっと行政と一体となって取り組んでいきたいと思います。

茂木　企業家としては、自然を壊す犯人にならないように努力しなければなりません。

例えば、ゴミ問題では、分別回収は市民の役割、それを処理場まで運ぶのは行政の役割、そして処理するのはわれわれ企業が分担して費用を出そうということで、いま話が進んでいます。

リサイクルして出来上がった商品はかなり高くなってしまうのですが、その高くなる部分を、お互いに「きれいにしよう」ということで話し合って処理することが大事なのではないでしょうか。

根本　とにもかくにも、皆さんのコンセンサスをいただくことが一番大切なことだと考えています。そのために行政側からの働きかけもしていきますし、市民の皆さんも大いに意見を述べていただきたいと思います。

(3) 来場者の評価

来場者の評価を把握して、今後の「まちづくり」の参考資料にするために、次のような項目によるアンケート調査を実施した。

1．性別・年齢
2．居住地（市内であれば在住年数）
3．職業
4．フォーラムの開催をどのように知りましたか？　新聞・市広報誌など（選択式）
5．フォーラムに参加してどのように感じましたか？　懐かしく思った・誇りに思ったなど（選択式）
6．現在の野田市内で自然や歴史的建造物などで好きな風景はどこですか？

7．これからのまちづくりについての意見

8．フォーラムについての感想

これらの質問の中でも、5はフォーラムにより市民の意識の変化のあり様を見ようとするもの。6は、「市民」の景観に関する意識を知ることができる。7は、「まちづくり」に関する意見を少しでも多くの住民から聴こうとするもの。8は、何でも自由に意見を述べてもらう。約400人の来場者のうち回答者は115人。

最初に来場者であるが、若者の参加は少なく、参加者の85%が40才代から60才代である（図4）。若者の参加を少しでも多くするために、俳優の山下真司氏を呼ぶなどの企画段階での配慮をしたつもりであったが、結果的には30才代以前の若者の注目を集めることはできなかった。来場者は、市内居住者が91%と大部分を占め、市外は周辺地域の人たちである。フォーラム開催の広報は、野田市広報紙やタウン紙などの市内向けのもの以外にも、市外向けとして東武野田線に車内ポスターを掲示したり、新聞でも案内したが、フォーラムの趣旨が野田の「まちづくり」ということから、市外の人たちの関心を呼ぶことはあまりできなかったようだ。それは、来場者による開催情報の入手法を見れば、野田市広報紙が58%、タウン紙15%というように、市内向けの情報によって来場した人たちが7割を越えていることからも判る。また、来場者の職業は60才代以上の無職、50才代の主婦、50才代以上の会社員などが目立つ（表2）。

来場者の感想をみて興味深いことは、パネルディ

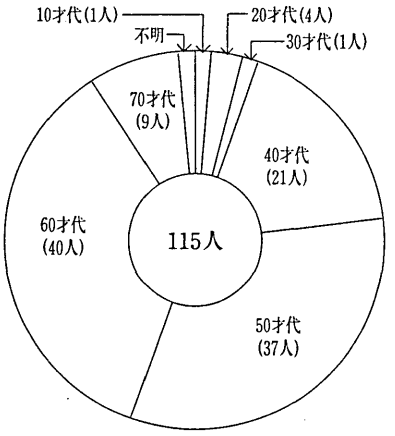

図4：フォーラムの年齢別来館者数
（来館者約400人中、アンケート回答者115人）

表2：フォーラム来場者の年齢・職業別の内訳（単位：人）

職業＼年代	10～30才代	40才代	50才代	60才代	70才代	計
会社員	1	5	12	11	1	30
自営業	0	6	7	1	1	15
公務員	2	7	3	0	0	12
教員	0	0	0	1	0	1
主婦	0	3	12	5	2	22
無職	0	0	1	18	6	25
学生	3	0	0	0	0	3
その他	0	0	1	4	1	5
計	6	21	36	40	10	113

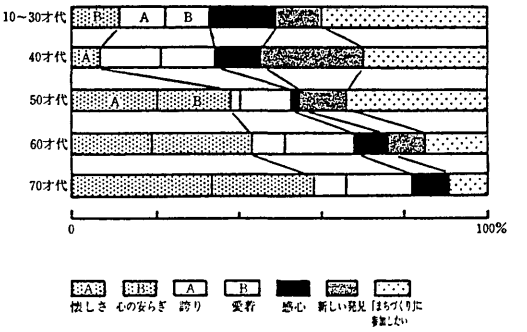

図5：来場者によるフォーラムの感想

スカッションにより、自分も「まちづくりに参加したい」と積極的な感想を寄せる人が10～50才代の年齢層の解答の中で最も多いのに対して、60～70才代では、スライド上映による野田の歴史的景観を見て、「懐かしく思った」「安らぎを感じた」という人が多かったことである（図5）。このことは、青年～壮年層は「まちづくり」に積極的な姿勢を見せるのに対して、高齢者は「まちづくり」の理解者にはなりえても、積極的に参加する意欲があまりないことを示すように思われる。

その他の感想として次のようなものがある。「古いものに新しい発見が出来てよかった」（女性、52才、在住52年、主婦）、「野田市の歴史的な成り立ちについて新しい見方ができた。新しい町づくりの動きをもっと市民にＰＲし、市民の関心を高めることが大事である」（男性、61才、在住20年、会社員）、「育ったまちを再認識したひと時」（男性、63才、在住53年、非常勤役員）、「最初の集まりのため総論として良

かった。今後は各論で集まりたい。まち＝生活のための集落として、経済・自然・文化・行政等で」(男性、60才、在住33年、無職)、「難しいところもあるが早く新しい町をつくりたい」(男性、61才、在住22年、無職)、「まちづくり＝人づくり（礼儀正しい市民）大切と思いました」(男性、63才、在住20年、無職）など。

野田市内の好きな風景については、１位から10位までを見る（複数回答可)。すると、やはり特別展とほぼ同じような結果が出た。

１位	清水公園	48人
２位	江戸川の眺め	29人
３位	興風会館	18人
４位	上花輪歴史館	14人
５位	御用蔵	13人
６位	キッコーマン本社前～茂木本家前	12人
７位	市民会館（旧茂木佐邸）	９人
８位	利根川の眺め	８人
９位	林	７人
10位	郷土博物館	７人

野田の新しいまちづくりに関する来場者の意見は、おおよそ次のようにまとめることができる。

「交通網の整備、特に地下鉄８号線や東武野田線の複線化」

「開発と自然保護の両立は難しいが、うまく住み分けを考えて欲しい」

「自然を大切にしていきたい」

「生活の便利さをもとめるよりも、自然を保護してゆきたい」

「まちづくりには市民一人一人が参加することが大切。まちづくりに参加したい」

「買い物がしやすい商店街の環境整備」

「ゴミ問題の解決」

「歴史的・民俗的遺産を残しながら、新しいものとのバランスをとったまちづくり」

「市内の名所巡りができる道案内の整備」

その外、次のような意見もあった。「街づくりは人づくりであるということ。野田は地理性・地域性特色から閉鎖的な面が強いので、どんどん外に出るような諸活動をお願いしたい」(男性、25才、在住25年、会社員)、「自然＝たんぼ。これ以上、市内の田の耕作面積を減らさないような施策をぜひすすめて欲しい」(男性、47才、在住47年、会社員)、「車が多すぎるためそうぞうしいまち（特に愛宕駅周辺)、道路が狭い」(女性、52才、在住17年、主婦)、「ヒューマンサイズの街づくりが今後求められると思われる（これまでは箱物が中心であった)」(男性、54才、在住15年、会社員)、「現在の緑を減少させることなく、また歴史的史蹟、建造・景観等すばらしい資源を活かして、歴史感のある落ち着いたまちづくりを是非推進されることを切に望みます」(男性、61才、在住3.5年、会社員)、「野田に美術館があればよいと思う。市民の為の作品が常備かざれる所がほしい」(男性、61才、在住61年、無職)、「観光のためや単なる外向けではなく、住んでいる人にとって最もいい街をつくる観点が必要。そのために住んでいる人により歴史を知ってもらう努力が必要」(男性、62才、在住30年、無職)、「静かな町もよろしいですが、もう少しあかぬけた楽しい町になったら良いですね」(女性、65才、在住41年、主婦)、「自然は総論ではなく各論で…自然100のように残すものを示した方がよい」(男性、67才、在住50年、無職)、「野田市内は、各地域によって特徴を持っている（例、旧野田町中央と川間、梅郷など)。それ故、その地域ごとに大きなテーマをもち、その特徴を生かした町づくりする。例えば、中央は歴史とお祭りのエリア、川間は商業と町並みなど。画一的でない町づくりをすれば市民も親しめるのでは…。とにかく、歴史的、民俗的遺産と自然環境を出来るだけ残すことはもちろんです」(女性、60才代、在住40年、主婦）など。

フォーラムに対する来場者の自由な感想は、大略次のようにまとめられる。

「今後もこのような会を続けてほしい」

「よい企画であった」

「パネルディスカッションの人選がよかった」

「パネルディスカッションの内容が充実していた」

「勉強になった」

「来場者の意見を聞いてほしかった」

「会場に若者が少ないのが残念であった」

この中でも特に、今後もこのような企画の継続を望む声が多かった。そのほかにも次のような意見があった。「まちづくりは大変だが、公開してフォーラムが開かれるだけでもすごいことだ」(女性、22才、柏市在住、学生)、「個人の責任まで要求を出される

核心をついた意見まで出されたのが良かった」(男性、45才、市外在住、会社員)、「市長の意見を聞き、これからどのように実行のされるか楽しみです」(男性、47才、在住47年、自営業)、「町づくりが市民の協力でうまくいく様、一人一人が心がける大切さを知り協力していきたいと思います」(女性、51才、在住21年、自営業)、「自然保護は自分保護、皆の幸福は自分の幸福」(男性、50才、在住50年、自営業)、「会頭の話に参考になるところがあった」(男性、54才、在住17年、会社員) など。

以上の感想から、大方の来場者は今回の企画を評価してくれたようである。しかし、時間の都合により、出演者と来場者とのコミュニケーションがはかれず、情報の一方的な伝達になってしまったなどの問題点が残るし、こうした手法が最良だとは必ずしも考えないが、ともかく「まちづくり」の実践的な試みの場として一応有意義であったと思う。

次の段階は、これらを将来の「まちづくり」につなげてゆくことが求められる。「まちづくり」は行政だけが行なうものではなく「市民」も自覚をもち積極的に関わるべきものであるが、フォーラムで公表された見解は、今後それぞれの立場で「まちづくり」を行なおうとする際の基本的な考え方の一つになることを望む。

3．結　語

このような特別展とその関連事業としてのフォーラムの成果をまとめると次のようになる。特別展は過去に目を向けたものであることから、野田市在住の30才代の住民には「知的理解」を得ることになったが、40才代以降の住民にはノスタルジックな「感動」にウエイトがおかれた。しかしながら両者に共通したことは、地元に対する「誇り」や「愛着」をもったという感想がほぼ一定していたことである。

住民意識を高めていくためには、郷土博物館はまずその地域を理解できる情報を住民に提供することが先決であるし、それにより地域に対する「誇り」や「愛着」を育むことができる。しかし、ここで注目すべきことは、その目標がある程度達成できたからといって必ずしも住民意識が高まる訳ではないということである。これはアンケートの仕方にも問題があるかもしれないが、歴史や文化を大切に守り育てていく「まちづくり」について意見をもとめたところ、その大部分は行政要求型の意見であった。住民が自覚してまちづくりのために何ができるのかを考え実践していこうという主体的姿勢は希薄である。

そこで、フォーラムでは、古写真を通して過去の様子を理解することを基礎において、現在と将来のまちづくりを志向した。パネルディスカッションでは、まちづくりにおける各分野の代表者に登場していただき、野田の歴史を共通認識におき、自然と人間が共存していくためには、これまでの経済優先のまちづくりへの反省や、今後の展望などについて建設的な意見が取り交わされた。それぞれの立場の人が今何を問題としており、その問題解決の方策や認識などについて率直な見解が述べられた。また、このなかでは「まちづくり」は住民が主体性をもつことが必要であること、住民が公共的な感覚を養い、住民エゴに陥らないことなども触れられた。

このような企画の反応は、特別展とは異なるものである。詳細は前述した通りであるが、感想として、10才代～50才代の住民にはかなりの割合で、「まちづくり」に参加していきたいという積極的なものが目だったことである。しかし、60才代以降では、古写真のスライド映写による「懐かしさ」「心の安らぎ」というノスタルジックな感情が優先した。このようにみると、フォーラムを一つの機会にして50才代までの住民は「まちづくり」に意欲をもつようになったことが理解できる。

現代における博物館の社会的な役割はいったい何であろうか。博物館において、資料を収集し、整理保管し、調査研究し、教育普及する諸機能は、博物館としての社会的役割を果たすための方法にほかならない。それにはいろいろな役割があるはずであるが、郷土博物館としての役割の一つに「まちづくり」をあげることができる。今回報告したものは、郷土博物館がこの課題に寄与するための試みの一例である。ここでは、従来のように館内の活動にとどまらず、館外においても行政や住民などの幅広い人たちとの活動を試みた。その結果、郷土博物館にも「まちづくり」に不可欠となる住民意識を高めていく可能性のあることを確認することができた。